

まじ・みちおさんの詩

アリくん

アリくん アリくん
きみは だれ
にんげんの ぼくは
さぶろうだけど
アリくん アリくん
きみは だれ
アリくん アリくん
ここは どこ
にんげんで いえは
につぽんだけど
アリくん アリくん
ここは どこ

くまさん

はるが きて
めが さめて
くまさん ぼんやり かんがえた
さいているのは たんぽぽだが
ええと ぼくは だれだつけ
はるが きて
めが さめて
くまさん ぼんやり かわに きた
みずに うつつた いいかお みて
そうだ ぼくは くまだつた
よかつたな

さかな

さかなやさんが
さかなを うつてゐるのを
さかなは しらない
にんげんが みんな
さかなを たべてゐるのを
さかなは しらない
うみの さかなも
かわの さかなも
みんな しらない

おかあさん

おかあさんは
ぼくを 一ばん すき！
ぼくは
おかあさんを 一ばん すき！
かぜ ふけ びようびよう
あめ ふれ じゃんじゃか

あとがき

茨木のり子

『鎮魂歌』は私の第三詩集に当り、一九六五年（昭和四〇）に思潮社から刊行された。

小田久郎さん、川西健介さんのお世話になり、装幀は和田誠さんだった。フランス装の瀟洒なもので、やっと詩集らしい本のできる時代になったのだという感慨もあった。

けれども増刷にも至らず、すぐに絶版になった。

こんな古いものに目をつけて、今回、童話屋の田中和雄さんがさっさと復刊の運びにして下さったのである。装幀も島田光雄さんがまったく新しく作り直し、縦糸と横糸のデザインになった。

私の詩の書きかたは、どこか歳月を織るところがあるので、こちらの気持ちにもびったりと合う。

「りゅりえんれんの物語」の初出は、一九六一年（昭和三六）の初期ユリイカ（詩誌）で、社主であった故伊達得夫さんが「特別ですよ」と言いながら、秘蔵の中国の剪紙きりがみをカットに使って下さったのも、なつかしい思い出である。

一九五八年（昭和二三）北海道で、りゅりえんれん氏が発見された時、新聞の報道は大々的で、当時誰もがこのニュースを知っていた。その渦中であえて書く必要があるだろうか？という逡巡もありながら、内部から衝きあげてくるものがあった、どうしても書かねばならぬという思いに従った。

人間の記憶の風化はおそろしく早い。今頃になって、「これは現実にあった話なんですか？」と、半信半疑の様子で、質問してくる人が多くなった。

やはり書いておいてよかったのかもしれない。

りゅりえんれん氏は、二〇〇〇年九月、八十七歳で逝かれた。損害賠償を求めた訴訟がやっと今年勝訴となり、「国は原告に二十万支払え」という判決が下ったのに、またもや控訴となつて、裁判は子息に引きつがれている。

なにしろ強制連行のシンボルであり、生き証人であり、彼のうしろには無念の白骨累々るるるなのである。

一九四五年八月十五日の日本国の負けつぷりの悪さが、今に尾を引いていると思ひ知らされることが多い。

五十六年間という歳月は何だったのだろうか。

苦い苦い思いを噛みしめながら、まだ二十代の若い編集者——渡辺とものさんとともに、改めて校正刷に目を通したところである。